

きかでさて有けり、よふけて刀自がつぼねへ來たり、人々はやふしたまひぬ、おこともふしねといふに、おどろきて、いぬきもわがへやへ行ければ、刀自はおのがふしどにいぬにけり、やゝありていぬきが聲して、あはやとさげべども、例の翁丸がものむさぼりに來るなめれと驚かで、刀自はかうよりに火ともしにかしこへ行て、いぬきがたえいたりたるかたへに、黒かみのおちゐたるを見て、すはもの、けこそあなれとよばひけるにおどろかたで、とみにはしりつどひて引たてたれど、いぬきはつやくものもえいはず、いざりいで、よゝとなく、こどのやうをとひはべれば、たゞ物のありて、かたのあたりへさはりけるやうにおばえけるには、はや髪はきられたりければ、絶いりつと、わな、くく、かたりけるかゝる事は野ぎつねなどのわざにて侍るよし、人の申ければ、

まだきにもきつにはめけりうば玉の夜もふけぬまに落る黒髪

### 享和元冬

問宮士信識

〔半日閑話〕文化七庚午年四月廿日の朝下谷小島氏富五郎家の婢小女朝起て玄關の戸を開んとせしに、頻りに頭重く成様に覺えしが、忽然として髪落たり、分々の髪切れたるは、ねばりけ有に、臭氣あるものなれど、左にはあらずと云去年小日向七軒屋敷間宮氏の婢のきられしば、宵よりまきりにねむけ有てきられしと云、

### 〔一話一言十七〕剪髮

甲午夏、忽傳有妖、剪人辮髮、婦女割其衣底襟、一時驚喧、官捕無獲、久之漸懈、而妖亦絕、方其擾也、兵部侍郎何公之婿某、適出門送客、忽狂奔不止、僮僕挽之不及、尾行十餘里、進內城至東單牌樓道旁、有飲馬汚水溝、某俛身掬飲、遂倒地臥不起、市人聚觀、見其冠服鮮好、兩目瞪視、不能言、相顧莫測、已而奴僕追至、覓車載歸、及檢視辮髮、則其半烏有矣、以冷水沃之、復嘆其面、中夜甦、而言曰、初送客、升車欲返、見一著繭紬長衫人、戴草笠、黑面短髻、立數武、外對之而笑、心中已搖々無定、渠忽轉身招